

## 未来は国際にありー国際バカロレアという選択

### 広島インターナショナルスクール校長:ピーター マッケンジー

2009年9月立命館宇治中学校・高等学校でのスピーチを編集したものです。

翻訳:Noriko Nishiguchi

今から 40 年と少し前、国際バカロレア機構はスイスのジュネーブで設立されました。これは多くの学者や教育者の発案によるもので、その大半はジュネーブ・インターナショナルスクールの関係者でした。国際バカロレア資格という形で理念を具現化させた創設者たち、残念ながら 1960 年代当時はほぼ男性によって占められていましたが、彼らを理想主義と実用主義が突き動かしていました。そして、理想を求めつつ実用に徹する当初の姿勢は、国際バカロレアの終始一貫した特色となってきました。

創設者たちが実用面の課題としたのは、世界中で大学入学資格として認められる卒業資格を作り出すことでした。国際バカロレア初代事務局長のアレック・ピーターソンは、ジュネーブ・インターナショナルスクールを訪問したときの記録を残しており、そこで彼は、最終学年の物理クラスの担当教師が、スイスのマトゥーラ、フランスのバカロレア、イギリスの GCE・A レベル、アメリカン・カレッジ・ボード主催の AP テスト、つまり 4 カ国の国家試験対策に奮闘する姿を目の当たりにしたと書いています。

この物理教師の苦労は、生徒たちが母国の大学入学資格試験に合格しなければならないという現実起因していました。東京のアメリカンスクールやローマのブリティッシュスクール、あるいはサンフランシスコのフレンチスクールでは無縁の問題でした。こうした学校の教育は自国のカリキュラムに即しており、教育言語も必然的に自国語でした。そして生徒たちはあたかもニューヨーク、ロンドン、パリで通学していたかのごとく卒業し、大学の入学許可を手にしたのです。その一方でジュネーブ・インターナショナルスクールのような「正真正銘」のインターナショナルスクールが 50 カ国の教育課程に対応しなければならないとは、期待すべくもありませんでした。

もちろん、学校側もそのような対応をすることは望みませんでした。

1950年代を迎える頃には、ジュネーブ・インターナショナルスクールは唯一無二の存在ではなかったものの、世界各国の子供たちを受け入れて教育する学校は依然として数えるほどしかありませんでした。1924年、ジュネーブのわずか数週間後に横浜インターナショナルスクールが誕生し、さらに一握りの学校が続きましたが、1950年代半ばまで「インターナショナル」を自称する学校の数はごく限られていました。

1950年代後半から1960年代初頭にかけて、状況は劇的に変化し始めました。この変化は平凡な私の職歴からも読み取れます。私が初めてお世話になったインターナショナルスクールはスイスの学校で、創設されたのは1960年です。現在の勤務校である広島インターナショナルスクールは1962年、その前に勤めていたタンザニアの学校は1963年に設立されています。つまり、異なる大陸の異なる国で3つの学校がいずれも「インターナショナル」を掲げ、3年ほどの間で立て続けに開校したのです。こうした事例はほかにも多くあり、実際に日本も例外ではありません。京都インターナショナルスクールは1957年に誕生し、さらに北海道インターナショナルスクールは1958年、清泉インターナショナル学園は1962年、名古屋インターナショナルスクールは1964年といった具合に、各校の創立が相次ぎました。

まさにこうした状況の中で国際バカロレア資格は生まれたのです。1967年までに国際バカロレア機構の事務局がジュネーブに開設され、1968年には教育プログラムの提供が始まりました。そして1970年には最初の卒業生となったわずか29名が、国際バカロレア試験の結果に基づいて大学入学を果たしました。

それ以後は毎年のように成長と拡大を遂げ、めざましい結果を残してきました。初のトライアルが実施された40年前の国際バカロレア試験には、6カ国・7校が参加しただけでした。私が国際バカロレアの存在を知った1992年には世界中に380の認定校があり、今から10年前の1999年には780校となりました。私の勤務校である広島インターナショナルスクールが認定を受けた2005年には1300校に達し、今月初めに公式ウェブサイトを確認した時点で、認定校は全世界で合計2002を数えるまでになりました。

こうして国際バカロレアは設立以降、文字通り毎年途切れることなく成長し、そのペースはますます加速しています。現在、国際バカロレア・ディプロマ・プログラムの実施校は 120 を超える国々に存在しています。インターナショナルスクールが自らの課題を克服するために開発した仕組みが、今では各国の正規の教育制度に基づく何百もの学校で導入されています。事実、私どものようなインターナショナルスクールはすでに少数派であり、全世界で 2000 に及ぶ国際バカロレア認定校の半数超は公立校なのです。

何がこうした成長の原動力となってきたのでしょうか。それが広告宣伝活動でないことは確かです。なぜなら国際バカロレアは非営利団体であり、さらに過去に一度たりとも広告宣伝費に支出していないことを誇りにしているからです。つまり、口コミの力だけで評判がここまで広がったということなのです。

では、国際バカロレアにはどんな魅力があるのでしょうか。何がそれほど特別なのでしょうか。

主に 2 つの要素が挙げられると思います。

先ほど私は、国際バカロレアが実用主義と理想主義を両立させる姿勢から生み出された、と申し上げました。創設者たちの目標は、世界各国の一流大学から受け入れられ、認められ、重んじられる水準の教育プログラムを開発することでした。そこには実用に徹する取り組みが求められました。

その一方で、国際化の影響をますます受けるようになっていた生徒たちや家族のニーズを満たすだけにとどまらない、国際感覚を積極的に養えるようなカリキュラムの構築を目指したのです。そこには理想を追求する創設者たちの志がありました。

ひとつの学校で、世界各地から集った教師が 50 を超える国々から来た生徒を指導するということは、創設者たちの目には問題ではなく機会として映っていました。ハーバード、オックスフォード、ソルボンヌをはじめ、世界中の何百という大学から認められる国際的なカリキュラムの設計は、国家の教育制度に基づく内向きの教育から脱却する機会であり、単なる面倒な仕事ではありませんでした。国際バカロレアの

創設者たちは外国での生活や仕事の経験を持ち、2ヶ国語もしくは3ヶ国語を操り、国家や文化の壁を難なく飛び越えられる人物揃いであり、そうした能力が将来的に重要性を増すことを自らの見識と先見の明によって理解していたのです。

国際バカロレアの創設者たちの眼差しは、国内よりも世界に、過去よりも未来に注がれていたのです。こうした視座は40年の歳月を経た今に至るまで揺らぐことはなく、プログラムの成功によって、1960年代に生み出された教育モデルの先見性は見事に実証されています。

この教育モデルは当初、少数のインターナショナルスクールの中で期待を集めました。それは学校の性格上、国の教育課程というものが適さない、もしくは望ましくない、あるいはその両方だったからです。しかし現在では、21世紀という時代に対応した教育の在り方が模索されるなかで、多くの保護者、教師、学校はもとより、中央の教育行政に対しても訴求力を持つまでになったのです。

では次に、国際バカロレア・ディプロマ・プログラムの内容を少しご紹介しましょう。

そこでもう一度、1960年代にジュネーブその他で開催され、国際バカロレアの輪郭と骨格が打ち出された協議の場に皆さまをお連れしたいと思います。

国際バカロレア資格の作成を主導したメンバーの出身国は、ほとんどが西欧諸国、イギリス、アメリカのいずれかでした。このことが一部でしばしば問題視されてきたことについては、即座に認めざるを得ません。つまり、国際バカロレアは欧米諸国が自由主義的価値を世界に広める手段であり、それほど「インターナショナル」なものではないという指摘です。率直に申し上げれば、こうした批判にも一理あると思います。国際バカロレアはすべての文化、人種、伝統、信条を真に尊重し、理解と寛容を広めることを目指しています。しかし知性に基づいて言えば、その根底には、創設者たち自身が教育を受けた大陸ヨーロッパ、イギリス、北米の伝統が存在しています。それと同時に、いかなる共通点があるにせよ、これらの伝統の間には著しい相違があったこと、かつ現在もそうであるという点も認識しておくべきでしょう。

たとえば、私自身はイギリスで生まれ、イギリスで教育を受けました。そして物心のついた頃には、18歳の時点で受験する全国统一試験の成績が、志望大学に入学できるかどうかを大きく左右することを理解していました。この試験は、16歳から18歳までの2年間で勉強するわずか3科目に関する知識と理解を評価するもので、当時はそうしたシステムに対して何の疑問を感じませんでした。今ではかなり特異な仕組みだと思っています。

このシステムによって、16歳になった生徒たちは教科を大幅に絞り込み、3科目のみを専門的に勉強するよう勧められ、かつ求められたのです。そして文字通り専門科目に集中しました。私の当時の親友は、16歳から18歳の2年間をもっぱらドイツ語、フランス語、ロシア語の勉強に充てました。数学、国語、科学は一切なく、美術や音楽などの芸術系科目、歴史、地理その他の社会科学系科目もまったく学びませんでした。あるいは、物理と数学を選び、さらにもうひとつ数学を加えて3科目とした友人たちもいました。

これを私の妻が受けた教育と比較してみましょう。妻はスイス人で、チューリッヒの学校に通いました。彼女も私と同様、18歳または19歳になれば重要な卒業試験が待ち受けていることを了解していました。しかし試験までの道のりは随分と異なるもので、私は2年間で3科目だったのに対し、彼女は4年半をかけて12科目以上を網羅しました。私の受けた教育は極端に絞り込まれていましたが、妻は幅広く学んだわけです。彼女を待ち受けていた試験とは、スイス・マトゥーラでした。また、国境の向こう側ではドイツの生徒たちが同様の統一試験であるアビトゥアに向けて勉学に励み、ジュネーブから一步国境を越えると、フランスの生徒たちがバカロリア合格を目指している、という状況でした。

このように、大陸ヨーロッパでは多くの人々が、当然ながら国際バカロリア資格の作成にかかわった創設者たちの大多数も、広範な分野を網羅する教育、すなわち科学、芸術、数学、文化等、さまざまな学問領域から幅広く学ばせるカリキュラムを重視していました。これとは対照的にイギリスでは、生徒たちを得意科目に専念させるシステムを疑問視する声はほとんどありませんでした。そのため、入学前の2年間に数学2科目と物理を学んだ工学系の大学生は、学部生になる時点ですでに専攻分野の内容にかなり踏み込んでいたのです。

大陸ヨーロッパとイギリスの教育システムには、もうひとつ重要な相違点がありました。私が受験した 1974 年の試験では、科目同士の関連性はほぼ皆無でした。そのため、3 科目のうち 2 科目は難なく合格し、残る 1 科目のみ不合格ということがあり得たのです。一方、大陸ヨーロッパにおけるバカロレア型の統一試験では、多くの科目でいずれも相応の評価を獲得しなければ合格できませんでした。2 つか 3 つの科目に秀で、その他多くの分野では絶望的という生徒は、イギリスでは何ら問題ありませんでしたが、大陸ヨーロッパでは決して試験を突破できなかったのです。

このようにイギリスと大陸ヨーロッパの教育モデルは著しく異なっていました。まさにそうした相違点によって、今の私たちがよく知っている国際バカロレア資格の特徴が形成されました。

国際バカロレア資格が「バカロレア」と称されているように、まずは大陸ヨーロッパ側に軍配が上がりました。つまり、全科目を突破しなければ資格を取得できない仕組みが採用されたのです。実際、世界平均で見た場合、合格率は年ベースで約 80 パーセントですから、受験生の 5 人に 1 人は不合格となります。

その一方でイギリス側も、コンカレント型の 2 年制課程という枠組みを維持することに何とか成功しました。言い換えれば、国際バカロレアは「単位制」ではないため、11 年生で生物学、12 年生で化学の単位を取るとか、今年日本語で翌年は英語を、といった履修方法は成立しません。

また、教育の幅という問題については妥協点を巧みに見出すことで合意がなされ、採用された方式はこれまで時の試練に耐えてきたように思います。必修科目は、5 科目でも 7 科目でもなく合計 6 科目と定められ、数学、第 1 言語、第 2 言語に加え、実験科学と社会科学から最低 1 科目ずつ、残り 1 科目を第 3 言語もしくは科学系その他から選択して履修することが義務づけられました。そうすることで、過度な特化を認めない大陸ヨーロッパの幅広く統合的な教育モデルが保持されたわけです。

しかし同時に、生徒たちは一定の専門性を身につけられますし、またそうしなければなりません。必修科目のうち3つは標準レベル、残る3つは上級レベルでの履修が義務づけられているからです。上級レベルの科目ではより多くの時間をかけてより深く学ぶことになります。

先ほど登場した学友が1972年当時に国際バカロレアの認定校に通っていたとすれば、3つの言語を上級レベルで履修していたかもしれません。そうすれば、彼も専門に特化することができたでしょう。しかし一方で、数学、歴史、生物学といった科目を標準レベルで履修していたのではないのでしょうか。

このように、教科の幅と深みを両立させた教育課程を作り上げていったわけですが、別の側面として学習内容についても乗り越えるべき課題がありました。例えば物理なら、モスクワでもメルボルンでも学習内容は同じですが、歴史や文学はどうでしょうか。国際バカロレアの教育では、どの国の歴史を、文学を、誰の物語を教えればよいのでしょうか。

ここがおそらく、国際バカロレアが「国際」を名乗る資格を手に入れているところでしょう。私はもともと歴史教師ですが、国際バカロレアの歴史クラスを担当するようになったのは1990年代初頭でした。アメリカ人とロシア人の生徒が同席するクラスで、冷戦について教えました。南アフリカ共和国の白人生徒とアメリカの黒人生徒が隣同士に座っている状況で、アパルトヘイト問題を取り上げました。アラブ人とユダヤ人の生徒に対して中東史の授業を行いましたし、アメリカ人と日本人の生徒に向かって、真珠湾攻撃と広島への原爆投下について教えたのです。こうした状況で可能な立場はたったひとつです。国家主義、孤立主義、そして郷党心を越えた立場だけです。

国際バカロレアの歴史教育では、特定の国の成り立ちではなく、「人類の歩み」を学びます。文学教育でも同様に、文化的背景や言語がそれぞれに異なる作家たちが著した、さまざまな作品を読まなければなりません。国家による教育では、時として意識的あるいは無意識的に、また、常にではないにせよ大抵は誠実な意図をもって、当然のこととして自国の成り立ちを教えます。そうした教育を通じて、子供たちは

何をどのように考えるかを学び、価値観や振る舞いを身につけていきます。「我々」とは何者か、「彼ら」とは何者かを学ぶのです。

まさにこの部分において国際バカロレアはユニークなのであり、他の教育課程と大きく異なるのです。私はよく「インターナショナルスクールとは何ですか」とか「国際教育とは何ですか」と尋ねられることがあります。大変よい質問だと思います。安直な答えは持ち合わせていませんが、ひとつの示唆を与えることはできます。インターナショナルスクールは国家による学校ではなく、国際教育は国家による教育ではないということです。当たり前ではないか、と思われるかもしれませんが。しかし考えれば考えるほど、そこに途方もなく深い意味があることに気づかされます。これとほぼ同じように、国際バカロレアによる教育も世界に意識を開かせるものなのです。それ以外の方向性はありません。

ここまで、国際バカロレア資格の原点から構造、そして内容について述べてきました。では教授法についてはどうでしょうか。教師はどのように生徒を教え、生徒はどのように学ぶのでしょうか。何か特別な点があるでしょうか。私はあると思っています。

国際バカロレアでは、ソクラテス式問答法、弁証法による教授スタイルを採用しています。教師は生徒に対し、解答ではなく問題を提示します。質問する態度を奨励し、暗記よりも批判的思考を評価します。また、知識の拡大よりも理解力の向上に比重を置きます。生徒たちが活発に学ぶように促し、時に論争を繰り広げるように仕向けることさえあるのです。

この点をさらに理解していただくために、簡単な逸話をご紹介します。東アフリカのある学校で校長を務めていた頃の出来事です。ある 10 代の女子生徒の父親が私のところに苦情を言いに来ました。良識のある娘思いの父親なのですが、かなり保守的な文化で生まれ育った人でした。彼の苦情はまさにそこから生まれていました。娘を退学させようと考えていると告げられたので、理由を尋ねてみたところ、「彼女が自分の頭で考え始めたから」という答えが返ってきたのです。

このように国際バカロレアでは、生徒たちは自分の頭で考えるように促されます。物事を鵜呑みにせず、疑問点を洗い出し、異議を申し立てるように仕向けられます。与えられた知識を無批判に受け入れるのではなく、自分なりの考えを構築するように奨励されるのです。私自身も、こうした教育には利点が多いと思っています。

本日は演題を「未来は国際にあり」とさせていただきましたが、これは私自身の確信に基づいています。これまで6カ国で生活し、5カ国で仕事を経験しました。あらゆる国籍や文化的背景の教え子、同僚、人々と巡り合うことができ、彼らから多くを学ぶことができました。訪れた国は全大陸・50カ国を数えるまでになりました。こうした経験のすべてが、私の人生を本当に豊かなものにしてくれました。

ひとつかふたつ前の世代であれば、こうした経験は珍しかったことでしょう。しかし現在では、ごく当たり前のものとなっています。今や多くの若者の未来には国際的な世界が待ち受けており、彼らの人生はそうした世界でいっそう豊かなものになるでしょう。

国際バカロレアの歴史は50年目に突入しました。1960年代では野心的な構想とされたものが、現在では教育プログラムとして広く成功を収めています。ひと世代前では利点とされた能力が、現在では必要不可欠とされています。

未来が国際的なのであれば、そうした未来を見据えて最善の準備をした若者が、最も首尾よく生き抜くことになるでしょう。私の知りうる限り、そうした教育を実現するための最適解は、国際バカロレア資格を置いてほかにありません。

ありがとうございました。